第３課　人間の状態

【暗唱聖句】

「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっています」ローマ3:23

【今週のテーマ】

【日曜日・神の力】

「わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシャ人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。 1:17 福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。「正しい者は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです」ローマ1:16，17

福音を語るのが恥ずかしいと感じることがあるでしょうか。日本は恥の文化です。自分がどのように思われるのかを気にすることが多いです。そのため「福音を恥としない」という言葉に胸の痛みを覚える人もいることでしょう。ただ、原語では「福音を伝えるのが恥ずかしいことと思わない」というニュアンスよりも、「愚かな行為とは思わない」というニュアンスがあるようです。つまり、パウロは福音の内容を確信をもって語っているということです。その確信とは、すべての人にとって福音が神の力になるということです。また、福音には神の義が啓示されているということです。パウロのように正しいことを伝えているのだという確信がなければ、福音をのべ伝えることは難しいでしょう。

　では、その福音とはそもそも何なのでしょうか。福音と訳されたギリシャ語は「良い知らせ」という意味の言葉です。しかも、それは単に良い知らせではなく、キリストに関わる良い知らせです。つまり、人類の救い主について、わたしたちの主なる神について、永遠の命についての良い知らせです。

ただ、この福音のメッセージが真に福音となるためには、信仰が必要です。「初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです」とパウロが言う通りです。

【月曜日・人は皆、罪を犯して】

「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっています」ローマ3:23

性善説…人間は善を行うべき道徳的本性を先天的に有しており、悪の行為はその本性を隠蔽することから起こるとする説。正統的儒学の人間観。孟子の教え。

性悪説…人間の本性を利己的欲望とみて、善の行為は後天的習得によってのみ可能とする説。孟子の性善説にする荀子（じゅんし）の教え。

神道では、六根清浄という考え方があり、人間の本性は生まれつき清く、生活中に外側に汚れがつくので、外側

をお払いすれば清くなると考えていします。つまり性善説に立っています。日本人はどちらかというと、この性

善説に立っている、あるいはそれを信じたいと思っている人が多いようです。しかし、聖書は性善説か性悪説か

と問われれば、性悪説となるでしょう。ただ元々神様が人間を作られたときのアダムとエバの状態は違いました。しかし、罪を犯した結果、清かった心が一瞬にして汚れていきました。

　性善説であろうと性悪説であろうと、結局のところ最後は罪を犯さない人間は一人もいないという点では同じ

です。それは聖書が「人は皆、罪を犯して」と言う通りです。その結果として人はどうなったのかというと、「神

様の栄光を受けられなくなっています」と教えています。この「神様の栄光を受けられなくなっている」とはどういう意味でしょうか。これは「神様の栄光に達しない」という意味です。つまり、神様のようにはなれないということです。元々人間が神様に似せて創造されたのです。しかし、罪の結果、神様に似ているどころか、逆にほど遠い存在となってしまったということです。しかし、絶望的というわけではありません。それは自分の罪を認め、主に立ち帰るならば、もう一度神様の義が与えられるからです。

「すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差

別もありません」ローマ3:22

【火曜日・進歩】

「自分では知恵があると吹聴しながら愚かになり、滅びることのない神の栄光を、滅び去る人間や鳥や獣や這うものなどに似せた像と取り替えたのです」ローマ1:22，23

およそ2000年前に書かれたパウロの手紙の言葉は、現在生きるわたしたちが読んでも違和感なく、その通りだと思わされます。多くの日本人は化学は発達した21世紀における今日でさえ、「滅びることのない神の栄光を、滅び去る人間や鳥や獣や這うものなどに似せた像と取り替え」、愚かなことをしています。

　かつて人々は、人類は進歩し、科学技術の発展と倫理観の向上により、理想郷を築き上げていくことができると考えました。確かに科学技術は目覚ましい発展を遂げ、生活は便利で快適になっています。しかし、それによってより幸福が訪れたのでしょうか。人間が行うことは変わることがないどころか、ますます悪くなるばかりではないでしょうか。その理由についてパウロは次のように述べています。

「そこで神は、彼らが心の欲望によって不潔なことをするにまかせられ」ローマ1:24

多くの人間は神の教えを無視し、欲望のままに生きようとしています。そのため神様はその欲望のままに生きるに任せられたのだと述べています。悪の歯止めがきかなくなっているのです。逆に言えば、神様の教えを第一に求めるとき、人間は変われるということです。

「彼らは神を認めようとしなかったので、神は彼らを無価値な思いに渡され、そのため、彼らはしてはならないことをするようになりました」ローマ1:28

神様は人間を本当に価値あることではなく、何の価値もないことにばかり思いを向けるようにされました。それは神様を認めようとはしなかったのが原因だとパウロは言います。逆に言えば、人間が神様を認めるときに、本当に価値あるものがわかるということです。

　しかし、愚かな人間は罪の結果、死ぬことになるとの定めを知っておりながら、それを止めることができないのです。これが罪の恐ろしい力なのです。

「彼らは、このようなことを行う者が死に値するという神の定めを知っていながら、自分でそれを行うだけではなく、他人の同じ行為をも是認しています」ローマ1:32

【水曜日・ユダヤ人と異邦人に共通するもの】

パウロは異邦人たちの罪を指摘したあとで、異邦人たちに比べて遥かに優位な立場で生きてきた同胞のユダヤ人たちの罪に対しても言及しています。罪人という点においては、ユダヤ人も異邦人も変わらないということです。

「ところで、あなたはユダヤ人と名乗り、律法に頼り、神を誇りとし、その御心を知り、律法によって教えられて何をなすべきかをわきまえています…それならば、あなたは他人には教えながら、自分には教えないのですか。「盗むな」と説きながら、盗むのですか」2:17～21

ユダヤ人クリスチャンたちの問題は、自分たちは神を誇りとし、律法や神の御心を知っていると自負し、それを行うように異邦人に言いながら、自分たちはそれを行っていないということでした。パウロは裁くことを止めるようにと勧告します。

「だから、すべて人を裁く者よ、弁解の余地はない。あなたは、他人を裁きながら、実は自分自身を罪に定めている。あなたも人を裁いて、同じことをしているからです」ローマ2:1

大切なのは、皆罪人であることを素直に認め、他者と比較したり、裁いたりしないことです。

【木曜日・福音と悔い改め】

「あるいは、神の憐れみがあなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と寛容と忍耐とを軽んじるのですか」ローマ2:4

罪人である人間を神様は深く憐れんでくださいます。この神の憐れみに触れたとき、わたしたちの心に悔い改めの思いが生まれます。神様は決して罰や恐怖によってわたしたちを悔い改め、すなわち神様の元へ帰ってくるようにとはなさいません。そうでなはく、こんなに罪深いのにそれでも優しく愛してくださる神様の憐れみに触れたとき、はじめて私たちの心は神のもとへと突き動かされるのです。愛こそ、人を動かす最大の力なのです。

ところが、わたしたちはその神様の愛と憐れみを当たり前のことと思い、無意識のうちに軽んじてしまうことがあるのです。このことを注意するようにとパウロは教えています。神様の忍耐と憐れみを軽んじ、心をかたくなにして悔い改めようとしないなら、神の裁きが下ることになります。

「あなたは、かたくなで心を改めようとせず、神の怒りを自分のために蓄えています。この怒りは、神が正しい裁きを行われる怒りの日に現れるでしょう」ローマ2:5

また、神様は一人ひとりの行いに報いられます。

「神はおのおのの行いに従ってお報いになります。すなわち、忍耐強く善を行い、栄光と誉れと不滅のものを求める者には、永遠の命をお与えになり、反抗心にかられ、真理ではなく不義に従う者には、怒りと憤りをお示しになります」ローマ2:6

「忍耐強く善を行い、栄光と誉れと不滅のものを求める者には、永遠の命をお与えになり、反抗心にかられ、真理ではなく不義に従う者には、怒りと憤りをお示しになります」。このようにはっきりと聖書に書かれているにも関わらず、神様の憐れみを軽んじ、神様の裁きを軽く考えることがないように注意しなければなりません。わたしたちの行う善が永遠の命にふさわしいのでは決してありません。ただ、神様の御心を生きようとする一人ひとりを、神様は憐れんでくださるということです。